

# 育児に対する態度へのイメージと親の育児への評価の関連

仲 美里\*・吉澤千夏\*\*

(令和4年9月9日受付；令和4年11月10日受理)

## 要 旨

本研究は、青年の育児に対する態度へのイメージと自らの母親・父親の養育態度の評価との関連を明らかにするために、青年期にある大学生179名を対象とし、アンケート調査を行った。調査項目は「育児に対する態度」30項目、「親の養育態度」では「育児への積極性」「育児モデル」の2項目について、それぞれ母親と父親に対して評価を依頼した(計4項目)。「育児に対する態度」については因子分析を行い、その結果と「親の養育態度」への評価との関連について分析を行ったところ、以下の点が明らかになった。

(1)「育児に対する態度」については男女間で平均値に有意な差がみられた項目は少ない。また、「親の養育態度」に対する評価においても男女間で平均値に有意差は認められない。このことから、大学生の育児に対する態度へのイメージ及び親の養育態度への評価において、男女間ではあまり差異はないといえる。

(2)「育児に対する態度」へのイメージについて因子分析を行った結果、「育児肯定」因子、「育児否定」因子、「育児忌避」因子、「育児重圧」因子の4因子が抽出された。

(3)「育児に対する態度」の因子分析結果と「親の養育態度」への評価の間で相関分析を行ったところ、「育児肯定」因子において「親の養育態度」への評価4項目すべてと有意な正の相関がみられた。また、「育児忌避」因子では母親を育児のモデルとする項目との間で有意な負の相関がみられた。このことから、親の養育を肯定的に受け止めることは育児を肯定的なものとしてイメージすることにプラスの影響を与えていると考えられる。一方、母親を育児の際のモデルと捉えていることは、子育てを否定的または回避するようなイメージを低減させることが示唆された。

## KEY WORDS

young generation 青年, attitudes toward child-caring 育児に対する態度, evaluations of their parental care 父母の育児の評価

## 1. 緒言

近年、家族形態の変化や少子化など、子どもと子どもを育てることに関わる環境や状況の変化が著しい。そのような中で大人になっていく子どもたちは、かつての子どもたちに比して、幼い子どもの育つ姿を間近で見ても、実際に関わる機会が少なく、子どもの成長過程やそれに関わる周囲の環境の役割について経験を通して知る機会が減少していると言われている。その一方で、マスメディアやSNS等を通じて様々な子育てに関する情報が提供されている。例えば子育ては楽しく幸せなものといったポジティブなものから、お金がかかるもの、大変なもの、または児童虐待や子どもや子育てが家庭の貧困など、その内容は多岐にわたる。

学校教育において、子どもの育ちや生活、子どもが育つ環境としての家族については教科「家庭」がその学習を担っている<sup>(1)(2)</sup>。小学校「家庭」において自分自身の育ちとそれに関わる家族の役割について学んだ後に<sup>(3)</sup>、中学校・高等学校において一般化された「子ども」の発達や生活、遊びの姿を学び、その育ちに関わる他者となる家族や保育者、地域の役割について体系的に学んでいく。その一方で、育児に対する考え方や子どもに対する見方については、学校教育の中でそれらを形成することは不十分であったという指摘もなされている<sup>(4)</sup>。また、子どもたちには自らが子どもとして体験した子育てがあり、それぞれに家族や養育者があり、日常の中で様々な子育てにまつわる情報にさらされている。このように、子どもや子育てに関わる多様な知識や経験、情報に囲まれている現在、青年期にある若者は子育てや親の役割や親イメージをどのように捉えているのだろうか。

例えば、青年期の育児観を捉えるために、育児に対する態度に注目し分析した研究では、子どもに対する感情、男女の性役割観、対象者の父母の養育態度、対象者の対人関係、対象者の自己概念などについて検討している<sup>(5)</sup>。それによると、育児に対する態度を問う30項目<sup>(6)</sup>と関連する項目は、子どもに対する感情のみであることが示されてい

る。また、育児に対する態度について「肯定」「否定」の2つの因子のみならず、さらに多様な側面をとらえた因子を想定することにより、育児に対する態度のより詳細な検討が可能になることを示唆している。

また、青年が親となることを想定したとき、最も身近な育児のイメージは自らが受けてきた育児であり、その育児を行う親の姿が、育児のモデルとなることは容易に想像できる。この自分の育児のモデルとしての親については、これまでいくつかの考察がなされている。例えば、被養育体験と育児に向かう態度形成の関連に着目し、大学生を対象とした質問紙調査では、成長に伴い育児に対して距離を取りがちになるとされる男子にとって、「同じ様な育児をしたいと思えるモデル」としての父親に育てられることが、将来の育児に対する不安・消極性を抑制する効果が期待できることが示唆されている<sup>(7)</sup>。また、女子大学生を対象とし、自分の親の育児に対する認識が「なりたい親」に及ぼす影響について検討した質問紙調査において、自らの母子関係を良好であったと認識していた人は、自分の親のようになりたいと思っていたことが明らかにされている<sup>(8)</sup>。さらに、子育てに男性が関わるということの重要性に着目し、幼稚園・保育園に通う子どもをもつ父親を対象にした質問紙調査では、具体的な子育てモデルの有無が男性の育児参加を促進・阻害する要因の一つとして挙げられている<sup>(9)</sup>。加えて、現在子育て中の母親にとって、実母はいわゆるワンオペ育児を行ってきた世代であり、唯一持っている子育てモデルは母親が1人で行う子育てであると述べており、そのことが他者の助けを求めにくく、子育て負担感を抱え込む状況に繋がるということが指摘されている<sup>(10)</sup>。これらの研究は、育児モデルの有無やその姿が自身の育児に与える影響を示唆するものであり、具体的で望ましい育児モデルを持つことは、自分自身の望ましい育児に繋がると考えられる。

その最も身近な育児モデルとしての親の養育態度がいかんして形成されたかについては、いくつかの研究がすでになされている。例えば、幼児をもつ父親・母親を対象とした質問紙調査から、父親・母親ともに、自身の被養育経験が子どもへの養育態度に同様の形で受け継がれているということを示している<sup>(11)</sup>。また、大学生を対象とした質問紙調査から、男女ともに父・母から「養護された」と認識したり、自分の親をこの人でよかった等と考えたりする人は、「自分も早く子どもを育てたい」といった準備性が高まることを示している<sup>(12)</sup>。

以上の研究結果は、育児に対する態度は自分が受けてきた親の養育態度に影響されることを示しており、青年自身の育児に対する態度をどのようにイメージするかと親の養育態度への評価との関連を検討することは、自らの被養護性と養護性の関連を明らかにすることを意味する。一般的に、自分が受けてきた親の養育態度と自分の育児に対する態度には関連があるとされる一方で、社会の中にある多様な価値観を選択・統合し、新しい父親像・母親像を作り出すのは、これから親になる青年自身である<sup>(13)</sup>という指摘もある。このことから、社会の中の多様な価値観に触れる機会を持つ青年たちが、親の養育態度をどのように認識しているのか、そして、その認識が自分の育児に対する態度にどのような影響を与えているのかを検討することは、青年の育児観の形成を捉える意味で極めて重要な意味を持つと考えられる。

そこで本研究は、青年の育児に対する態度へのイメージの様相とその構造を捉えるとともに、それらと母親・父親の養育への評価との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象

対象者は新潟県内J大学に在学する学生179名である。

### 2.2 調査時期

調査時期は2019年6月～7月である。

### 2.3 調査の内容及び方法

無記名式質問紙法による調査を行う。質問項目は、育児に対する態度を問う30項目、親の養育態度を「育児への積極性」「育児のモデル」として評価する2項目を設定し、それぞれ父親、母親に対する評価を問う項目からなる。育児に対する態度を問う30項目は育児に対する態度の尺度<sup>(14)</sup>を用いる。回答にあたっては、「あてはまる」を「1」、「どちらかといえばあてはまる」を「2」、「どちらかといえばあてはまらない」を「3」、「あてはまらない」を「4」とする4段階評定で回答を求める。一方、親の養育態度を評価する項目については、「そう思う」を「1」、「どちらかといえばそう思う」を「2」、「どちらともいえない」を「3」、「どちらかといえばそう思わない」を「4」、「そう思わない」を「5」とする5段階評定で回答を求める。

分析に当たってはまず、性別による育児に対する態度のイメージや親の養育態度への評価の差異を捉えるために、性別によるt検定を行う。さらに、対象者が育児に対する態度にどのようなイメージをもっているのか、その構造を捉えるために、因子分析を行う。その後、その因子分析によって抽出された因子と、親の養育態度への評価にどのような関連があるのかを明らかにするための相関分析を行う。

本調査紙では上記以外にも、父母以外の育児モデルの有無や具体的な人物名、その人物をモデルや目標とする理由等についても質問も行っている。しかし、本稿ではその点については言及しないため、これらの説明については省略する。

### 3. 結果及び考察

#### 3. 1 対象者の年齢及び性別

対象者は179名であり、その内訳は男性70名(39.1%)、女性109名(60.9%)である。対象者の平均年齢は20.0歳(SD=1.36)である。

#### 3. 2 育児に対する態度へのイメージと親の養育態度への評価の男女比較

##### 3. 2. 1 育児に対する態度へのイメージ

まず、対象者の育児に対する態度に対するイメージについて、男女間の相違を明らかにするために、30項目それぞれの結果について性別によるt検定を行う。回答は4件法で行い、最小値は1(あてはまる)、最大値は4(あてはまらない)であることから、平均値2.5を中央値として、2.5より小さければ質問項目に対して肯定的であり、2.5より大きければ否定的であるといえる。

表1は育児に対する態度へのイメージについて、各項目の男女別の平均値を示したものである。男女それぞれの平均値をみると、質問項目に対して否定的である2.5よりも高い値を示しているのは、「育児は面倒くさいものである」(男:2.65, 女:2.69)、「育児は物の見方、考え方を狭くさせるものである」(男:3.44, 女:3.41)、「育児は煩わしいものである」(男:2.74, 女:2.95)の3項目のみである。これらの項目は育児をネガティブに捉える項目であり、それに対して否定的イメージを持つということは、育児に対する態度についてポジティブなイメージを持っているといえる。一方で、その他の27項目については肯定的なイメージを持っているといえる。しかしこれら27項目のうち、「育児は自分を犠牲にするものである」「育児は怖いものである」「育児はストレスがたまるものである」「育児はつらいものである」「育児は不安なものである」「育児は苦勞の多いものである」「育児は疲れるものである」「育児は忙しいものである」「育児は忍耐を必要とするものである」「育児は休みなくするものである」「育児は責任が重すぎるものである」「育児は時々投げ出したくなるものである」の12項目については育児に対してネガティブな態度を示す項目であり、平均値が2.5より小さいことから、育児をネガティブなものとして捉えていると考えられる。このことから、対象者の育児に対する態度へのイメージについては、肯定的なものだけではなく、否定的なイメージも持っているといえる。

さらに、男女間で平均値に有意差が認められる項目をみると、「育児は感動があるものである」(男:1.27, 女:1.12)、「育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである」(男:1.51, 女:1.31)の2項目において有意差が、「育児は自分を成長させるものである」(男:1.50, 女:1.35)、「育児は怖いものである」(男:2.07, 女:2.32)、「育児は喜びを伴うものである」(男:1.26, 女:1.14)の3項目において有意な差のある傾向が認められる。これらのうち、育児に対するポジティブな態度を示す「育児は感動があるものである」「育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである」「育児は自分を成長させるものである」「育児は喜びを伴うものである」の4項目においては男子よりも女子において平均値が低く、育児に対するネガティブな態度を示す「育児は怖いものである」では女子よりも男子において平均値が低い。平均値が低いことは質問項目に対して肯定的なイメージを持つことを意味していることから、女子は男子に比べ、育児を感動や喜びがあり、自分を成長させ、今まで見えなかったものを見せてくれるものとイメージしているといえる。一方で男子は、女子に比して育児を怖いものであると捉えていると考えられる。

しかし、30項目中男女間で有意差が認められたのは5項目であり、残り25項目については有意差が認められないことから、男女間には育児に対する態度へのイメージに大きな差異はないことが示唆される。

##### 3. 2. 2 親の養育態度への評価

次に、親の養育態度に対する評価において男女間に差異があるのかを明らかにするために、親の養育に対する「育

児への積極性」 「育児のモデル」について母親・父親それぞれについて評価する項目について、男女間でのt検定を行う。回答は5件法で行い、最小値は1（そう思う）、最大値は5（そう思わない）であることから、平均値3.0を中央値として、3.0より小さければ質問項目に対して肯定的であり、3.0より大きければ否定的であるといえる。

表2は親の養育態度への評価について、各項目の男女別の平均値を示したものである。男女それぞれの平均値をみると、いずれも3.0以下であることから、父親・母親の双方に対して、育児の積極性や育児のモデルとして評価をしているといえる。

さらに、各項目について男女間でt検定を行ったところ、いずれの項目においても男女間で有意な差は認められない。このことから、親の育児に対する積極性と親を育児のモデルとしたいかどうかについては、男女間で差異はないといえる。

### 3.3 育児に対する態度へのイメージの因子分析

ここでは、対象者が育児に対する態度へのイメージがどのような構造になっているかを明らかにするために、因子分析を行う。具体的には、育児に対する態度へのイメージを問う30項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、8つの因子が表出した。スクリープロットをみると、第3因子と第4因子間の傾きは小さく、第4因子と第5因子の間の傾きが大きく、累積説明率が第4因子の段階で47.060%を示したことから、因子数を4として、再度因子分析を行った。その結果、「3. 育児は温かいものを感じさせるものである」「4. 育

表1 育児に対する態度へのイメージの男女比較

	$\bar{X}$ (SD)	
	男	女
1. 育児は楽しそうなものである (t(177)=-.534, n.s.)	1.63 (0.685)	1.69 (0.754)
2. 育児は自分を犠牲にするものである (t(177)=-.397, n.s.)	2.23 (0.765)	2.28 (0.768)
3. 育児は温かいものを感じさせるものである (t(176)=.969, n.s.)	1.36 (0.593)	1.28 (0.473)
4. 育児は面倒くさいものである (t(176)=-.264, n.s.)	2.65 (0.888)	2.69 (0.879)
5. 育児は自分を成長させるものである (t(177)=1.694, p<.10)	1.50 (0.608)	1.35 (0.567)
6. 育児は怖いものである (t(177)=-1.843, p<.10)	2.07 (0.840)	2.32 (0.912)
7. 育児はやりがいがあるものである (t(177)=-.601, n.s.)	1.19 (0.392)	1.23 (0.521)
8. 育児は物の見方、考え方を狭くさせるものである (t(177)=.285, n.s.)	3.44 (0.629)	3.41 (0.723)
9. 育児は喜びを伴うものである (t(122.540)=1.792, p<.10)	1.26 (0.472)	1.14 (0.372)
10. 育児はストレスがたまるものである (t(177)=.183, n.s.)	1.90 (0.745)	1.88 (0.649)
11. 育児はやってみたいことである (t(177)=.337, n.s.)	1.43 (0.672)	1.39 (0.653)
12. 育児はつらいものである (t(177)=-.240, n.s.)	2.00 (0.799)	2.03 (0.713)
13. 育児は感動があるものである (t(112.105)=2.168, p<.05)	1.27 (0.509)	1.12 (0.354)
14. 育児は煩わしいものである (t(177)=-1.651, n.s.)	2.74 (0.736)	2.95 (0.837)
15. 育児は嬉しいものである (t(177)=1.485, n.s.)	1.43 (0.527)	1.31 (0.504)
16. 育児は不安なものである (t(176)=.598, n.s.)	1.56 (0.605)	1.50 (0.634)
17. 育児は幸せを感じさせるものである (t(177)=.926, n.s.)	1.23 (0.487)	1.17 (0.420)
18. 育児は苦勞の多いものである (t(177)=.043, n.s.)	1.34 (0.508)	1.34 (0.531)
19. 育児は元気を与えてくれるものである (t(177)=1.206, n.s.)	1.41 (0.577)	1.31 (0.539)
20. 育児は疲れるものである (t(177)=.124, n.s.)	1.57 (0.604)	1.56 (0.630)
21. 育児は夢があるものである (t(177)=1.617, n.s.)	1.53 (0.653)	1.38 (0.590)
22. 育児は忙しいものである (t(141.990)=1.382, n.s.)	1.36 (0.483)	1.26 (0.460)
23. 育児はしていると優しくなれるものである (t(177)=.934, n.s.)	1.94 (0.778)	1.83 (0.739)
24. 育児は忍耐を必要とするものである (t(177)=.899, n.s.)	1.31 (0.526)	1.25 (0.455)
25. 育児は面白いものである (t(177)=.198, n.s.)	1.54 (0.582)	1.52 (0.702)
26. 育児は休みなくするものである (t(177)=-.828, n.s.)	1.83 (0.798)	1.94 (0.874)
27. 育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである (t(120.449)=2.204, p<.05)	1.51 (0.654)	1.31 (0.504)
28. 育児は責任が重すぎるものである (t(129.198)=.073, n.s.)	2.10 (0.783)	2.09 (0.660)
29. 育児は充実したときが過ごせるものである (t(177)=1.654, n.s.)	1.73 (0.658)	1.56 (0.673)
30. 育児は時々投げ出したくなるものである (t(177)=.267, n.s.)	1.99 (0.771)	1.95 (0.774)

網掛は育児に対してネガティブな態度を示す項目である

表2 親の養育態度への評価の男女比較

	$\bar{X}$ (SD)	
	男	女
あなたから見て、 あなたの母親は育児に積極的だった (t(174)=.826, n.s.)	1.48 (0.633)	1.39 (0.697)
あなたから見て、 あなたの父親は育児に積極的だった (t(175)=-.060, n.s.)	2.10 (1.100)	2.11 (1.017)
あなたは将来、 自分の母親のように育児をしたいと思えますか (t(174)=.095, n.s.)	1.75 (0.976)	1.74 (1.085)
あなたは将来、 自分の父親のように育児をしたいと思えますか (t(175)=-.535, n.s.)	2.17 (1.236)	2.28 (1.274)

法、プロマックス回転）を行った結果、8つの因子が表出した。スクリープロットをみると、第3因子と第4因子間の傾きは小さく、第4因子と第5因子の間の傾きが大きく、累積説明率が第4因子の段階で47.060%を示したことから、因子数を4として、再度因子分析を行った。その結果、「3. 育児は温かいものを感じさせるものである」「4. 育

児は面倒くさいものである」「13. 育児は感動があるものである」「16. 育児は不安なものである」の4項目は、いずれの因子に対しても大きな因子負荷量を持たなかったため分析から除外し、残りの26項目に対してさらに因子分析を行った。その結果、表3の通り4つの因子が抽出された。

第1因子は、「育児は元気を与えてくれるものである」「育児は嬉しいものである」「育児はやってみたいことである」「育児は幸せを感じさせるものである」「育児は夢があるものである」「育児は自分を成長させるものである」「育児は面白いものである」「育児はやりがいがあるものである」「育児は喜びを伴うものである」「育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである」「育児は楽しそうなものである」「育児は充実したときが過ごせるものである」「育児はしていると優しくなれるものである」の13項目から構成されており、育児に対して肯定的な態度を示す項目が高い負荷量を示している。そこで「育児肯定」因子と命名する。

第2因子は、「育児は疲れるものである」「育児は苦勞の多いものである」「育児はつらいものである」「育児はストレスがたまるものである」「育児は忙しいものである」「育児は忍耐を必要とするものである」「育児は時々投げ出しなくなるものである」「育児は自分を犠牲にするものである」の8項目から構成されており、育児に対して否定的な態度を示す項目が高い負荷量を示している。そこで「育児否定」因子と命名する。

第3因子は、「育児は物の見方、考え方を狭くさせるものである」「育児は煩わしいものである」「育児は怖いものである」の3項目から構成されている。いずれの項目も育児に否定的で、育児を回避しようとする態度を示している。そこで「育児忌避」因子と命名する。

第4因子は、「育児は責任が重すぎるものである」「育児は休みなくするものである」の2項目から構成されている。どちらの項目も、育児に対する責任を重く受け止める態度を示している。そこで「育児重圧」因子と命名する。

以上の結果は、育児に対する態度へのイメージにおいて第1因子「育児肯定因子」及び第2因子「育児否定因子」に加えて、第3因子「育児忌避因子」及び第4因子「育児重圧因子」の2つの因子が抽出されており、先行研究の結果とは異なっている<sup>(15)</sup>。第3因子に含まれる項目に注目すると、育児をすることによって自身の視野が狭くなることや育児の煩わしさや怖さに関する項目である。このことは、育児そのものに対する肯定または否定的なイメージを超

表3 育児に対する態度へのイメージの因子分析

因子名	質問項目	1	2	3	4
育児肯定	19. 育児は元気を与えてくれるものである	.816	.001	.088	-.064
	15. 育児は嬉しいものである	.762	.077	.040	.026
	11. 育児はやってみたいことである	.753	-.056	.086	-.067
	17. 育児は幸せを感じさせるものである	.729	.233	-.084	-.159
	21. 育児は夢があるものである	.692	.015	.012	.082
	5. 育児は自分を成長させるものである	.688	.006	.181	-.144
	25. 育児は面白いものである	.668	-.008	-.057	.112
	7. 育児はやりがいがあるものである	.663	.128	-.116	-.105
	9. 育児は喜びを伴うものである	.661	.121	-.177	-.095
	27. 育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである	.653	.039	.159	.136
	1. 育児は楽しそうなものである	.633	-.238	-.028	-.003
	29. 育児は充実したときが過ごせるものである	.599	-.205	-.029	.318
	23. 育児はしていると優しくなれるものである	.489	-.109	.037	.273
育児否定	20. 育児は疲れるものである	-.072	.760	-.217	.096
	18. 育児は苦勞の多いものである	.160	.670	-.102	-.052
	12. 育児はつらいものである	.125	.665	.245	-.069
	10. 育児はストレスがたまるものである	-.138	.646	.053	-.029
	22. 育児は忙しいものである	.251	.595	-.045	.076
	24. 育児は忍耐を必要とするものである	.174	.590	-.081	.150
	30. 育児は時々投げ出しなくなるものである	-.261	.563	-.091	.257
2. 育児は自分を犠牲にするものである	-.142	.461	.126	-.073	
育児忌避	8. 育児は物の見方、考え方を狭くさせるものである	.118	-.156	.578	.041
	14. 育児は煩わしいものである	-.215	.236	.414	.051
	6. 育児は怖いものである	.082	.272	.385	-.020
育児重圧	28. 育児は責任が重すぎるものである	-.037	.193	.172	.605
	26. 育児は休みなくするものである	.014	.042	-.061	.323

えて、自らが育児を担うことによって生じる自分自身のネガティブな変化や育児を困難だと感じる感情が見て取れる。育児に対する態度へのイメージにおける男女比較では、男女ともに育児に対する肯定的なイメージが高いことから、育児という行為そのものについては肯定的に受け止めつつも、自分自身が育児をするという視点に立ったとき、それに困難さを感じ、避けたいと思う感情が含まれていることが推察される。

さらに第4因子に含まれる項目は、育児に対する責任の重さや育児には休みがないとイメージするものである。本研究の対象者は教員養成大学に所属する学生であり、子どもと関わることの難しさや責任等を強く感じていることが示唆される。それゆえに、子どもを育てることは「責任が重すぎる」と感じ、実際に子どもたちとの日々の生活を想像すると「休みがない」ものと感じているのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究の対象者である青年期の学生は育児に対して「肯定的」「否定的」という、相反する2つのイメージを持つだけでなく、育児を回避し、重圧を感じるなど、より複雑なイメージを持っていると考えられる。

### 3. 4 育児に対する態度へのイメージの因子と親の養育態度への評価との関連

上記の因子分析より得られた育児に対する態度へのイメージに関する4つの因子と、親の養育態度への評価との間に関連があるかを検討するために、各因子に含まれる項目の合計得点と親の養育態度の得点を用いて、相関分析を行う。

#### 3. 4. 1 育児に対する態度へのイメージの因子を母・父に対する育児への積極性の評価との関連

表4は育児に対する態度へのイメージの因子分析から抽出された4因子と母親及び父親の育児への積極性に対する評価の項目間で相関分析を行った結果である。分析の結果、育児に対する態度へのイメージの「育児肯定因子」と母親・父親の育児への評価との間に有意な正の相関が認められる ( $p < .01$ )。相関係数に注目すると、「育児肯定因子」と母親の育児への積極性の評価では.323、父親の育児への積極性の評価では.217であり、いずれも弱い正の相関があるといえる。

表4 育児に対する態度へのイメージの因子分析結果と父母の育児への積極性への評価との関連  $r$

	あなたから見て、 あなたの母親は育児に積極的だった (n=176)	あなたから見て、 あなたの父親は育児に積極的だった (n=177)
育児肯定因子	.323**	.217**
育児否定因子	.011	-.021
育児忌避因子	-.128	-.045
育児重圧因子	.055	.139

\*\* :  $p < .01$

#### 3. 4. 2 育児に対する態度へのイメージの因子と「育児モデル」としての母・父に対する評価との関連

表5は育児に対する態度へのイメージの因子分析から抽出された4因子と「育児モデル」としての母・父に対する評価の項目間で相関分析を行った結果である。分析の結果、育児に対する態度へのイメージの「育児肯定因子」と「育児モデル」としての母・父に対する評価との間に有意な正の相関が認められる ( $p < .01$ )。また、「育児忌避因子」については、「育児モデル」としての母に対する評価との間に有意な負の相関が認められる ( $p < .05$ )。相関係数に注目すると、「育児肯定因子」と「育児モデル」としての母に対する評価では.381、「育児モデル」としての母に対する評価では.266であり、いずれも弱い正の相関があるといえる。一方、「育児忌避因子」と「育児モデル」としての母に対する評価では、-.169を示しており、その相関は極めて弱いといえる。

表5 育児に対する態度へのイメージの因子分析結果と育児モデルとしての父母への評価との関連  $r$

	あなたは将来、 自分の母親のように育児をしたいと思いますか (n=176)	あなたは将来、 自分の父親のように育児をしたいと思いますか (n=177)
育児肯定因子	.381**	.266**
育児否定因子	-.087	-.117
育児忌避因子	-.169*	-.112
育児重圧因子	.071	.025

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

育児に対する態度へのイメージの4因子と親の養育態度への評価との関連について相関分析を行った結果、育児肯定因子と4つの親の養育態度への評価において、その程度は弱いものの有意な正の相関が認められる。このことから、自らの母親または父親が育児に積極的であったと感じていたり、自分が育児をする際のモデルとして評価したりするほど、自分自身が育児に対してもつイメージは肯定的なものになると考えられる。つまり、母親・父親が育児に積極的であったことと、自分の育児のモデルとしたい対象であることは、子どもの育児への肯定的な態度へのイメージを強めることが推察される。

また、育児忌避因子については、その程度は極めて低いものの「あなたは将来、自分の母親のように育児をしたいと思いますか」との間のみ、有意な負の相関が認められる。一方で、育児忌避因子と「あなたは将来、自分の父親のように育児をしたいと思いますか」との間では相関がみられない。このことから、母親を育児モデルとして評価しているほど、育児を忌避する態度へのイメージが軽減されるものの、自分の父親を自分が育児をする際のモデルとしていることは、母親への評価とは異なり、育児を忌避する態度へのイメージを低くしないことが推察される。

以上のことから、親の養育態度への評価は育児に対する態度のイメージのうち、育児を肯定的に受け止めることに影響を及ぼすといえる。さらに、母親を子育てのモデルとして評価していることは、育児を避けようとする態度を低減させることが示唆される。

#### 4. おわりに

本研究は、青年の育児に対する態度へのイメージと自らの母親・父親の養育態度への評価との関連を明らかにすることを目的とし、青年期にある大学生及び大学院生を対象に「育児に対する態度」「親の養育態度」に関する質問紙調査を行い、「育児に対する態度」へのイメージの構造とそれらと「親の養育態度」への評価との関連を捉えたものである。分析の結果、大学生の育児に対する態度へのイメージ及び親の養育態度への評価において、男女間であまり違いはみられないこと、「育児に対する態度」へのイメージは「育児肯定」因子、「育児否定」因子、「育児忌避」因子、「育児重圧」因子の4因子から構成されること、親の養育を肯定的に受け止めることは育児を肯定的なものとしてイメージすることにプラスの影響を与えている一方で、母親を育児の際のモデルと捉えていることは、子育てを回避するような捉えを低減させることが示唆された。

近年、様々な姿で育児を公に発信する人々が増えていることから、それに伴い育児モデルとして、そういった母親・父親以外の他者や様々なキャラクターをイメージする人も増えていると考えられる。紙面の都合上割愛したものの、本研究の調査においても、母親・父親といった親族以外を育児モデルとして挙げている対象者が一定数みられている。このことから様々な育児の姿やその発信者が青年の育児モデルの多様化とそれに伴う育児に対する態度へのイメージの変化をもたらす可能性が考えられる。

多様なものに刺激を受けて変化していくと考えられる、育児に対する態度へのイメージや育児モデルについて、これから子どもと関わる青年がどのような情報に触れ、それを自らのイメージに反映させているのか、教科「家庭」の「保育」の学びのみならず、家族や友人関係、メディアなど多様な側面からとらえていくことが必要である。

なお、本研究の一部は、令和元年度上越教育大学卒業研究（仲美里）において、発表されている。  
本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- (1) 文部科学省（2017）中学校学習指導要領。
- (2) 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領。
- (3) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領。
- (4) 猪木省三（2013）青年の育児に対する態度と関連する要因：県立広島大学人間文化学部紀要 8 35-44.
- (5) 前掲（4）
- (6) 荒川善子（1992）女子青年の育児への積極性：広島女子大学家政学部児童学科卒業論文（未公刊）。
- (7) 寺見陽子・及川裕子・竹内伸宜・竹元恵子・松島京・伊藤篤（2017）被養育体験・養育体験と育児に向かう態度形成との関連－大学生を対象とした質問紙調査を通して：神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 10（2）231-238.

- (8) 櫻井豊世子・本多潤子 (2004) 「なりたい親」におよぼす思春期の親子関係の影響：田園調布学園大学人間福祉研究 7 65-76.
- (9) 三浦さつき (2011) 男性の育児参加の規定因に関する研究：福山大学こころの健康相談室紀要 5 27-35.
- (10) 今井充子・常盤洋子 (2011) 我国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討：The Kitakanto medical journal. 61 (3) 377-386.
- (11) 松本添実・赤澤淳子 (2018) 被養育経験と育児不安が養育態度に及ぼす影響：日本心理学会第82回大会論文集 841.
- (12) 糊澤玲子・福本俊・岩立志津夫 (2009) 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響：教育心理学研究 57, 168-179.
- (13) 大島聖美 (2014) 青年の親に対する認知の重要性 青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から：広島国際大学心理科学部紀要 2 (1) 69-78.
- (14) 前掲 (6)
- (15) 前掲 (5)



# The relationship between the images of attitudes toward childcare in adolescence and the evaluations for having done by their parents

Misato NAKA\* · Chinatsu YOSHIZAWA\*\*

## ABSTRACT

This study sought to clarify the relationship between the images of attitudes toward childcare and the evaluations of their parental care by the young generation. Specifically, 179 university students were surveyed for the questionnaire, which was composed of 30 items on the general attitudes toward childcare and four items on the evaluation of their parent's care for them. The former questions were explored through factor analysis, and the factors from them were explored in correlation with the findings of the evaluations of their parents' childcare for the subjects by the subject own. The results are as follows:

1. There are few differences in gender in the images of childcare and the evaluations done by their parents.
2. The result of factor analysis leads to the four factors, which are "affirmation," "denial," "avoidance," and "pressure" of child-caring about the images of attitudes toward childcare.
3. The results of the correlation of the factor of the images of attitudes toward childcare and the evaluations of their parents showed one of the factors, "affirmation" of childcare, related to all items of the evaluations of their parents is significant. In addition, the factor, "avoidance" of childcare, has a negative correlation to the evaluation of the mother which is thought to be a model of childcare. Positive acceptance of parents care for them made their thoughts about the images of childcare positive. On the other hand, the thought that young people recognize their mother as the ideal model of childcare relates a decrease negative or avoidant images of child rearing.